

「神話の創造」による商店街の活性化と持続可能なまちづくり —春日井市勝川駅前通商店街の取り組みをモデルとして—

Sustainable community building through the Reactivation of Kachigawa Shopping Street by means of creating a myth-using as a model of the case of Kachigawa shopping street in Kasugai City

羽 後 静 子
Seiko HANOCHI

1. はじめに

本稿では、春日井市勝川駅前通商店街（以下勝川商店街と略す）の再活性化に向けた諸活動の計画と実施における商店街と外部社会とのつながり方という事例を通して、持続可能なまちづくりにおける商店街店主と商店街の外部からその活性化に協力しようとするサポーター市民たちとの協力体制の自己組織化について考えてみたい。

なぜならば、一定の計画をまず作成したうえで、その実施を進める一般のアーバン・プランニングの手法とは一味違った「まちづくり」の特徴がみえてくると考えるからである。

そこには、上からのプランニングからは期待できない下からのプランニング、それをプランニングではなく自然発生的な自己組織化のプロセスと呼びたい訳であるが、日常生活で大事にしている人間関係を中心にさらに発展させ、これを支えにして協力者のネットワークを拡大していく、「目的合理」的なゲゼルシャフトにはない、ゲマインシャフト的な計画とその実施との積み重ねのプロセスがある。その成功の度合いは目的合理的な尺度を用いた評価方式では測定しにくいけれども、ゲマインシャフト的な人間関係を崩壊させてきたグローバル化の中で、ひとつのオルタナティブ社会発展の道を指し示しているように思われる。本稿は、そのような仮説に基づく「持続可能なまちづくり」の参加的観察の記録であり、その中で得られた知見を報告するものである。

2. 円環の時間のなかでの出会いと商店街の再活性化

勝川商店街の店主のリーダーたちが今日進めている「まちづくり」の諸活動を機械的に観察・記録することはそんなに難しいことではないかもしれない。そして、それがこれまでに勝川商店街への顧客を呼びもどすことにどれだけ成功したかを評価することも可能かもしれない。しかし、参加的観察者にとって、そのような機械的な判断だけでは測りしれない何かがこの商店街にはある。それは恐らくこの商店街を再活性化させようとするさまざまな「動き」が、決して合理主義的な「計画」の時間では捉えきれない何か別の「時間」が脈動していることを実感として悟らざるをえないからである。アーバン・プランニングの常識になっている短期・中期・長期計画の予測と計画とその実施、さらにはその評価が採用している直線的な時間とはおよそ異質な「時間」がこの商店街のなかに流れている。

おそらく日本中、どこの商店街であれ、外からきたものが商店街の中に一步踏み込んだ途端、私たちは、子どもの時に来たことがあるような懐かしさ、古くから馴染んだ見慣れた風景に戻ってきたような懐かしさを感じる時がある。勝川商店街には、整備され道幅も比較的広くなり、伝統的な商店街の狭い空間が構成する親密空間とは違う近代的まち並みの雰囲気が存在しているが、同時に昔なつかしい商店街の雰囲気がいまでも漂っていることに気がつく。本稿の筆者も、2004年に中部大学に赴任するまでもちろん勝川商店街には、足を踏み入れたこともなかったが、しかし商店街にはいったとたんにタイムスリップしたように子どものころを思い出した。

勝川商店街は、時間がゆっくりと円を描きながら流れているようなそんな心地よいリズムで時間が過ぎている。背後のJR勝川駅には、近代特有の直線的時間のなかで走る列車が発着するが、そこから僅か数十メートルしか離れていないにもかかわらず、商店街では、ゆっくりと時間が流れていて、人々は、毎月第3土曜日に開かれる弘法大師を偲ぶ「かちがわ弘法市」というハレの日が巡ってくるのを待ち望んでいる。昔日本の村落社会には、こうした時間感覚はあった。村落社会には、一定の時間が経過すると時間は古くなり汚れて否定的なものに転じるという考え方が潜んでいた。汚れた時間は害虫、疫病という形で日常的な秩序を脅かす。災いを吸収して去るのがハレの日の意味で、もともと芸能民集団は、災いを吸収してくれる役割を担っていた。こうした村落の生活時間の中で、古来、日本の村落で、祭りをきっかけにし、村に定住する生活者集団と、外から祭りでの厄払いをする移動する漂泊芸能民の集団とが一体となって祭りの晴れやかさを盛りたてることになっていた¹⁾。勝川商店街が、弘法市という祭りを商店街の再活性化の中心に据えたのは、このような日本古来の村や町の伝統にあやかって、まちづくりの円環時間のなかの結節点にしたと考えることができるであろう。いずれにせよ、この弘法市が、勝川商店街の定住生活者と漂泊芸能民ではないけれども、祭り

の際に仲間うちに引き入れられるサポーター集団との出会いの場を提供したことは注目に値する事実である。

3. 勝川商店街における「弘法市」の歴史的背景

村落にとっての宇宙は、中心の秩序と周縁の混沌との弁証法的関係からなりたっている。

もともと村が町に発展した時にその商業の拠点として発達したのが商店街であり、商店街は、そこに買い物に来る近在の人々のローカルな親密圏秩序の中心にあった。周縁の混沌の中にあった「よそ者」は、祭りを引き立たせる漂泊民や、近世にはテキヤ集団が大切にされ、それ以外の「よそ者」は歓迎されていなかった。ところが、今日では都会の中心が新興開発地の団地に、勝川商店街が所在する春日井市でも、名古屋のベッドタウンとして1970年代から高蔵寺地区が中心となり、大型店の乱立によって、勝川商店街は春日井市の周縁に追いやられた感がある。さらに数年前に勝川駅前に高層マンションが建ち、マンションの新住民と商店街の旧住民の間でどのように歴史を共有できるかが商店街の新しい問題となった。

その商店街にあらたに弘法市が立つようになった経緯を説明するには、勝川の歴史を少しさかのぼって記述する必要がある。勝川商店街の勝川の名前の由来には諸説ある。庄内川を歩いて渡れるところから徒歩川（かちかわ）という説。戦国時代、徳川家康軍と豊臣秀吉軍が小牧山でにらみ合う最中に、徳川家康の居城（岡崎）に豊臣軍が奇襲を仕掛けるという知らせを受け帰城するため、小牧山をあとに長久手に向かう途中、地元地主の先導で浅瀬の川を渡った時、徳川家康はこの“川”はなんという“川”かと尋ねたところ、地主が「かちがわ」と答え、家康は縁起がいいと先導したものに褒美を与えたことから、この川を徳川家康が命名したといわれるようになったという²⁾。この逸話の信ぴょう性はともかくとして、天正12年、小牧—長久手の戦いに出陣するおり、勝川の地名が縁起がよいと休憩したことは歴史的な事実である。

春日井勝川村は、江戸時代にはいつてからは、中山道に通じる下街道の宿場町として栄えた。それでも、庄内川の氾濫を抑えるためにくじ引きで人身御供になった庄屋の娘の悲話、「十五の森」という昔話に示されるように³⁾、勝川村は、自然の災害の多い中で結束力を誇る村であったようである。今日の商店街のリーダーたちの中には、江戸末期あるいは明治時代に勝川商店街の前進ともいえる商業活動を営んできた伝統を誇りにしている。春日井の銘菓である「ももらんぐ」の菓子舗・美濃屋は、当時中山道の宿場町であった春日井勝川村に1848年に創業している。和食レストランの「水徳」の歴史は、江戸中期奉公先の勝川宿の旅籠・住吉屋所有の土地を譲り受け、明治33年こ

に一膳飯屋「水徳」を開業した時に始まる⁴⁾。今日の勝川商店街には、このような長い歴史を持つ老舗に新しく店を開いたさまざまな業種のリーダーたちが参加している。

さて、この勝川商店街で弘法市がたつようになったのは2000年紀にはいつてからのことである。その前提には、当然弘法大師への信仰がある。弘法大師信仰は、宗派を問わず、四国八十八霊場をはじめ日本全国に広まっている。そして、弘法市を開くキッカケとなったのは、昭和3年、勝川駅前商店街奥に、全国にも類を見ない高さ18メートルの修行姿の弘法大師（空海）が建立された。勝川在住の山口悦太郎氏が私財を投入して所有地に建てたことに始まる。ということは、勝川に昔弘法大師が訪れたことに因んだ大師像ではなく、比較的最近に勝川在住の信者の寄進によって新たに建てられた巨像である。これが、今日の弘法市のシンボルとなったことは、単なる伝承を受け継ぐだけでなく、新しく地域の誇りとなる「神話」⁵⁾を開発する姿勢が勝川商店街のリーダーたちの特質であるということができよう。のちに明らかにするように、商店街の再活性化が弘法市が中心的な役割を果たしたのは、実は徳川家康の故事や、宿場町の伝統とは全く無関係な昭和時代に建立された新しい伝統、ある意味では近代の嵐の中で弘法大師の徳に縋ろうとする現在の勝川商店街のリーダーたちとそれほど隔たっていないのではないだろうか。昭和時代にかつての円環の時間を回復させようとした一人の勝川商店街のリーダーの思いを象徴する弘法大師像が、今商店街再活性化の拠点になっているとみることができるであろう。

4. 春日井市商店街の市街地開発事業と「弘法市」

名古屋市の北に位置する人口約30万人の春日井市は、高蔵寺ニュータウンを中心に人口が増加、発展してきた。人口増加に伴い、大型スーパーなどの市内進出により、市内の小売業の売り場面積が急増する一方で、商店街は、平成13～16年で22%も減少している。

後継者不足により、空き店舗が増加している。シャッターを下ろす商店が増加することから商店街は閑散としてとても「商店街といえない状況」⁶⁾が深刻化している。「商店街も絶滅危惧種」⁷⁾といった冗談と笑えない状況があるのである。

商工会議所から脱退する商店街もみられ、春日井市の中心商業地として発展してきた鳥居松地区では、商店街の組合員数ではピーク時の半減となり衰退が著しい⁸⁾。

勝川商店街の再活性化は、しかし円環の時間の支配しうる異世界への回帰では決してない。

その証拠には、勝川駅前商店街が、愛知県の市街地再開発事業の対象となっていて、そのアーバン・プランニングの直線時間のなかにも位置づけられているのである。この

再開発事業は、行政によるまちづくり方針を出発点にして、住民による勉強会、住民・行政による基本方針づくり、権利者による準備組織たちあげ、行政による位置づけ〔都市計画決定〕、法律に基づく再開発組合立ち上げ〔知事認可〕、権利の変換に対する同意（権利変換同意）、権利変換計画の認可（知事認可）、既存建物解体・再開発ビル工事着工、再開発ビル完成という直線的な、行政に協力する形の「再開発ビル」建築による「再開発事業」である。勝川商店街も、1990年からこの事業の対象地域になっており、新しいビルが現在完成している⁸⁾。

そのことは、それ自体として、勝川駅前通商店街の再開発に役立っているに違いないが、弘法市を中心にして、商店街のリーダーたちが進めている勝川再活性化の諸活動は、ハードな開発とは全く異質の人間関係を築くソフトな勝川商店街の内側の住民と外側の（顧客層を呼び込んでくれるであろう）サポーターとの人づくり、仲間づくりである。

その根幹をなしているのが、毎月の第三土曜日に開催される「かちがわ弘法市」である。新旧住民のふれあいの場、つまり先住の民（旧住民）と漂泊して定住した民（新住民）のふれあいであり、旧住民の店主やそこに住む高齢者と新住民のサラリーマン、外国籍市民、学生らとの触れ合いの場でもある。弘法市には、パラソル、テント・ショップやグルメ屋台が立ち並ぶ。弘法市を立ち上げた商店街のリーダーたちは、この「市」に勝川商店街の再活性化の拠点の役割を担わせようとしてきた。「消費者も大量消費を止め生活の価値観も大きく変わりつつある中で、我々は商店街にサードプレイス（家と仕事場の間を取り持つ第3の場所）としての役割、そして本来の「市」の機能を再生させる時ではないかと考え、市民が一体となったおらが街の「市」をつくりあげました。」と、弘法市の設立者は記している⁹⁾。弘法市は、かなり多様な市民たちの活動の拠点となってきた。まず、勝川のコミュニティの仲間づくりとしては、「市」とおなじころに、勝川の子供たちを集めた歌と踊りの集団「コボ勝川」がある。このグループをはじめとして、弘法市はさまざまな市民パフォーマンスに広場を提供してきた。弘法市は、勝川市民だけでなく勝川の外、とくに地域に在住する外国人たちにも、勝川商店街の仲立ちで、地域の市民と交流する「場所」を提供している。それはネパール・カレーなどの異国の料理に舌鼓をうつ国際交流の味の「市」であるばかりでなく、春日井市と共催で第1回多文化共生ふれあい文化祭が開かれ、ベトナムやタイ、フィリピン女性たちの歌とダンスを鑑賞するステージもできた¹⁰⁾。そればかりでなく、弘法市を拠点にして、全日本的な広がりを持つ活動も開催されたし、いずれは国際社会ともつながりを持つかもしれないという夢を描いての活動も始まっている。そのような勝川商店街を発展させる試みについては後述するので、ここでは、その背後にある弘法市の影の大きさを突起するにとどめよう。むしろ、弘法市を開くことで勢いづいた勝川商店街が、日本全国の商店街と協力するきっかけとなったのが、全国リサイクル商店街サミットであっ

た。このサミットによって、勝川商店街は、大型店の侵入によって買い物客を奪われて苦勞している日本全国の商店街と結束をかためることができたことに注目するとともに、このサミットで話し合われた商店街の諸問題や対策の立て方について、本稿のなかでふれるのに、良い機会であろう。その意味で、本稿では、この「サミット」で報告されたこと、議論されたことについてもふれておきたい。

5. 地域拠点、場の提供としての商店街の役割

全国リサイクル商店街サミット¹¹⁾は、1996年早稲田商店会から始まった。もともとの動機は、夏休み中、商店会のお客である早稲田大学の3万人の学生が夏休みにいなくなる夏枯れ対策のイベントに「環境、リサイクル」をテーマにリサイクル商店街サミットが開かれたのを皮切りに、全国のどこかの商店街が、持ち回りで引き受けて今日にいたっている。早稲田商店会は、1998年に空き缶やペットボトルを回収するエコステーションを設置し、リサイクルをテーマに地域振興を呼びかけ、商店街の全国的なネットワークに発展した。さらにこのネットワークを活用して地域の特産品を販売している。例えば長野県飯山市の雪の下で育ったニンジン甘くてくせがないということで評判をよび、大ヒット商品になったという。このような活動が、全国的な中学校の関心と呼び、修学旅行の観光スポットになったそう。『震災疎開パッケージ』年5,000円支払うと、巨大地震がおきたとき、2—3ヶ月疎開先にいくことができる。交通費も出る。その上、1年間地震がなかったら、疎開地の商店街のおすすめの3,000円の特産物がもらえるという仕組みで、全国18地域が疎開先となっている。第9回リサイクル・サミットのレセプション会場は、弘法市が立つ大弘法通りの入り口にあたる勝川駅前広場の路上に60以上のテントがや舞台がつくられて、路上の空間がそのまま、大レセプション会場となった。テントの出展は、自治体やホテル、企業に始まり、遠くの商店街の商店やN G O・N P Oやフェアトレードショップなどが、食べ物やいろいろな商品が並び、中部大学羽後ゼミの有志学生たちも、フランクフルトと飲み物を用意して、テント活動に参加して、商店街のひとたちや、行政、一般参加者たちとの交流を楽しんだ。

6. 教育機能・情報発信センターとしての商店街

リサイクル・サミット基調講演のなかで、YOSAKOIソーラン祭り実行委員会専務理事の長谷川岳氏は、商店街を中心にした地域が果たす教育機能としての役割として、商店街を中心にした、人と人とのコミュニケーションや人間関係が、地域の歴史や、文

化の発信、次世代への継承の役割を果たすこと、こどもや若者、高齢者に配慮するケア（相互扶助）、思いやり、犯罪の予防や未然に防ぐ協力関係や、震災などの災害時の助け合い、思いやりなど、こどもや青少年の人格形成に果たす機能の重要性を強調した。

以上のような教育機能と情報発信という二つの機能の共通性をもとにして、もともと商店街と大学との協力が成立することは驚くにあたらないが、具体的に勝川商店街と中部大学の教師や学生たちとの協力が始まったのには、本稿の筆者も関係しているので、その点について説明する。2005年7月9—10日に中部大学で開催された「人間の安全保障・地球市民フォーラム：ジェンダー平等と多文化共生をめざす都市ネットワーク」¹²⁾をきっかけに、筆者はフォーラムの市民実行委員会のメンバーと「中部多文化共生まちづくり協議会」¹³⁾を立ち上げ、春日井市の外国人問題について会合を重ねた。春日井市から勝川駅前商店街に中にある空き店舗を使って、春日井に住む外国人の拠点にしたかどうかという提案があった。その背後には、勝川駅前商店街が、街を市民に開かれた地域の拠点にするための第一歩として、第9回全国リサイクル商店街サミットの開催を準備しており、このサミットに学生や、外国人女性たちのパワーを吹き込めないかと考えていた。そのことについて、勝川駅前商店街振興組合の理事長（当時）であった長縄秀男氏に相談したことで、筆者のゼミ生有志とともに弘法市に協力することになった。これが、より広く商店街と中部大学教員および学生との交流のきっかけとなった。

この協力関係は、国連の「持続可能な教育」の10年の活動も手伝っていることを付記する必要があるだろう。国連は、2002年のヨハネスブルグ環境会議で、「持続可能な開発のための教育（ESD）」の10年を採択し、社会、経済、環境を総合的に教育する活動や学校教育活動を推進している。この協議会の設立は、大学と地域のネットワークによる協働の重要性を強調している「持続可能な開発」教育の趣旨にそうものであった。しかも、中部大学もこの地域拠点に参加して、地域に開かれた専門知識の拠点となり、もうひとつの専門知識を保有する市民の拠点である勝川商店街とともに活動し、共同で研究開発をしていくことが期待されている。

新自由主義グローバル化による地域格差の広がりにより、地域経済の単位としての商店街は、現在存亡の危機に直面している。大学経営もまたグローバル化と少子高齢化で転機に直面しており、大学と商店街との役割の上記の共通点からも、地域に開かれた商店街と、地域に開かれた大学との協力のもとで、地域の持続発展をめざすことは、「持続可能な開発のための教育（ESD）」の見地に立っても期待されることである。文化、情報の発信センターに脱皮しようとしている商店街と大学とのネットワークは、今後も益々重要になっていくのではないだろうか。

7. 弘法市からSNSへ

—リアルとヴァーチャルな商店街の「内」と「外」の連携

以上で述べてきたように、弘法市を中心にして、勝川商店街では、環境問題については、2010年に名古屋で開かれるCOP10（生物多様性条約締約国会議）の際に生物多様性の問題を取りあげることも検討しており、そのことでリサイクル・サミットの環境にやさしい商店街を作る動きが続いている。それとともに、多文化共生を大切にすることということで、とりあえずは、フィリピン女性NGO「中部日比ボランティア・ネットワーク（SALVIFIC）」¹⁴⁾ といろいろ協力を始めている。

フィリピン人たちもまた商店街の消費者である。彼女たち、彼らは、フィリピンでの特産品や一次産品、加工品の買い手であるだけでなく、故郷の村々には生産者となっている家族や友人がいる。商店街の祭りなどの機会に音楽や舞踏を紹介したり、故郷の料理を紹介したりして文化交流の積み上げによって生まれて相互信頼をもとにして、交易ネットワークを開発することができるという仮説をたてることができる。つまり「連帯経済」の実践活動として、春日井市商店街と春日井市の持続発展力を回復するために役立つことはもちろんだが、勝川商店街とマニラ・中部ルソンとの交易ネットワーク構築の可能性を探ることは、広く日比両国の親善のためにも役立つのである。上記の研究は商店街と地域コミュニティの崩壊が進行している今日、研究対象になっている勝川商店街と春日井市の持続発展力を生み出すばかりでなく、全国的にもまた南北交流・交易の活性化についても参考になる研究方法と成果を生み出すことが期待できる。これとは別に、春日井市の名物としてのサボテンを食材として活用する試み¹⁵⁾ などもあるが、将来メキシコなどのサボテンの産地との協力につながることは、現在では考えられていないが、将来の可能性がないわけではない。また、春日井市が書家小野道風の生誕の地であることと、勝川商店街内に大弘法像もあったもう一人の書聖である弘法大師にゆかりも深いことを活用できるのではないだろうか。「勝川商店街＋サポーター会議」のメンバーでもある書家波多野名翠氏の指導を受けて、書のコンテストなどを開くことも提案されているが、すでにその地ならしに、弘法市にサポーター会議メンバーが書いた書を張りぼての人間像に張り付けた展示物を弘法市に出品¹⁶⁾ している。書を弘法市の「売り物」にするのに、従来の伝統的な書のほかに、在留外国人の字を大胆に書く新しい書道を開いたらどうかという構想もあって、そこでも、勝川商店街を国際的な前衛の街にするという「夢」も生まれている。その夢よりも、もっと現実性があり、しかも商店街の地理的な制約を越えた活動として、勝川商店街を中心にSNSを立ち上げる計画が進んでいる。これは、COP10（生物多様性条約締約国会議）に市民から提言するために呼びかけられた「サイバー対話」で世界につなげようという考えである。SNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）¹⁷⁾ とはインターネット上で地域で元氣

な人たちをつなぐサークルであるといわれている。インターネットを使えば、人は会わなくてもすむといわれるが、そうではなく、むしろ従来リアルな世界でだけあっている人たちが、ヴァーチャルな世界でさらに頻繁に会うようになっている。「つなぐ」というよりも勝手にみんながつながり仲良くなる場をつくるのが地域活性化に直接つながることが、SNSの狙いである。いわば、舩（もやい）など伝統的日本型地域ネットワークが、今日のSNS地域ネットワークによってヴァーチャルに再生されることが期待されているのである¹⁸⁾。

このように交易ネットワークを開発しながら、春日井市の商店街関係者、在日フィリピン女性、その故郷の中小商工関係者の間に、SNSによるヴァーチャルな情報交換の場を設定することの可能性についても調査・研究する予定である。

このSNSシステムのサイトは、単に勝川商店街の内側の関係者だけを対象とせず、春日井市の中で高蔵寺ニュータウンのサポーターたちを巻き込むほか、庄内川の上流と下流をつなぎ、生物多様性に関するサイバー対話にも参加する予定を立てている。その意味で、弘法市に始まった勝川商店街の内側の市民と外側のサポーターとのリアルな人間関係は、SNSの導入とともに、春日井市全域、庄内川流域、そして世界的なネットワークの中に勝川商店街をヴァーチャルの世界のなかに位置づけることになる。

以上のように、弘法市の円環の時間のなかに次第に形成されてきた勝川商店街の内外の人脈づくりは、全国リサイクル・サミットを機会に全日本のネットワークに参加し、2010年10月の生物多様性条約締約会議の名古屋開催をきっかけに、「生命の多様性」についての「グローバルESD対話」にも参加する方向で動き始めている。そして、ハード中心で直線的な行政との再開発に協力をしながらも、ソフトな人間関係の環を広げる自己組織システムとして、弘法大師などについての「神話」を支えにして世界に広がる「夢」を生んでいる。その結果については、残念ながら本稿で論ずることができないが、商店街の持続発展を目指す一つのモデルケースになりつつあることだけは疑いをいれない。本稿は新しい「神話の創造」活動を通じて、その「夢」の形成過程をたどることしかできなかった。あとは今後継続する勝川商店街の実験に引き続き注目して協力するのみである。

注

- 1) 山口昌男 (2000年)『天皇制の文化人類学』岩波現代文庫, 岩波書店。
- 2) 服部博昭・水野隆編『勝川商店街史』勝川駅前通商店街振興組合発行 (平成19年) 木野瀬印刷。
- 3) 水谷和義絵・構成『紙芝居, 一五の森』。
- 4) 服部他編『勝川商店街史』同上。
- 5) 水野隆・岡本肇報告「勝川商店街+サポーター会議」2009年7月8日参照。
- 6) 長縄秀男2010年1月24日(日)に中部大学で開催された第3回伊勢三河湾流域圏ESDフォーラムで生物多様性条約締約国会議COP10に向けて政策提言を行うグローバルESD対話集会が持たれた。そこでの提言による。
- 7) 水野, 同上。
- 8) 村井亮治報告「SPACIAとまちづくり」(株)都市研究所スペース「勝川商店街+サポーター会議」(2009年11月9日)。
- 9) プロジェクト119勝川弘法市事務局編『であいふれ愛 勝川弘法市—かちがわ大弘法通り商店街』パンフレット。
- 10) 2008年3月春日井市との共催で行われた。
- 11) 第9回全国リサイクル商店街サミット春日井大会実行委員会編 (平成18年)『第9回 全国リサイクル サミット春日井大会報告書』株式会社二和印刷紙業。
- 12) 以下を参照。中部大学人間安全保障研究センター編『グローバル都市ネットワークにおける人間の安全保障—特集人間の安全保障・地球市民フォーラム2006』NO.2, 2006。羽後静子 (2009年)「<人の移動>とジェンダー化する<人間の不安全>」武者小路公秀編『人間の安全保障—国家中心主義をこえて—』ミネルヴァ書房。
- 13) この会は2007年に発足, 代表長縄秀男元勝川駅前通商店街振興組合理事長, 事務局は, 中部大学国際関係学部羽後研究室内。毎月第二水曜日に勝川商店街内で「商店街+サポーター会議」(二水会)を開催している。
- 14) SALVIFICとは, 春日井市を中心に小牧市, 犬山市, 瀬戸市内に住むフィリピン人と日本による助け合いネットワーク組織である。中部日比ボランティアネットワーク (共同代表, 武者小路公秀, 加藤アンナ) メンバーは, 約50名で事務局は羽後研究室内にある。
- 15) 出口美紀報告「勝川商店街+サポーター会議」(2009年9月9日)。
- 16) 波多野明翠報告「勝川商店街+サポーター会議」(2009年8月4日)。
- 17) SNSについては, 以下を参照のこと。和崎宏『地域SNS—ソーシャル・ネットワーキング Web2.0 時代のまちおこし実践ガイド』アスキー。
- 18) 日本経済新聞「地域でSNS活用」(2008年12月5日)。

参考文献・資料

勝川商店街＋サポーター会議報告配布資料

水野 隆，岡本 肇 2009年7月8日

波多野明翠 2009年8月4日

出口美紀，今枝 久 2009年9月9日

行本正雄，山羽 基 2009年10月14日

村井亮治 2009年11月9日。